

第二編

新潟地域調査報告

焼畑カブとシナ布 — 羽越国境地帯における 伝統的生業の生態地理学的研究 —

斎藤 功

I はじめに

山形県西田川郡温海町と新潟県岩船郡山北町には、焼畑農法による赤カブ栽培と古代織物といわれるシナ布の生産が行なわれている。筆者は、1980年7月、11月に現地で予備調査を行い、1982年6月の新潟巡検の際それらに関する資料を集めた。さらに1982年10月、12月に現地調査を行ったので、ここにその結果を報告するものである。

温海カブは、山形県温海町一帯を中心に古くから焼畑で栽培されてきた赤カブである。青葉 高によれば、温海カブは「濃い紫赤色をした丸カブで、土の中に入っていた光の当たらないところまで着色し、美しい。品質はしまっていて甘味があり、煮て食べるには硬いがナマスや漬物にした温海カブは他の品種の追従を許さない」ものであるという¹⁾。同氏は、焼畑という原始的農法に加えて、温海カブが江戸時代からの特産物であったという古記録を挙げ、かつ各種在来カブを育種学的に比較し、温海カブを含む東北地方の在来カブが、古い時代東北アジアから渡来したこと、つまり、シベリアルートによる伝播を示唆している²⁾。

地理学では山口弥一郎が1943年8月念珠ヶ関附近の焼畑を調査し、蕎麦とともに大根・赤カブの栽培を確認している³⁾。ところで、本地域は日本においても焼畑の面積が多いところであった。1950年の世界農林業センサスによれば、温海町、山北町には72.26 ha、30.82 haの焼畑・切替畑の面積があった。佐々木高明は、同統計により焼畑農家率が山戸村100%、福栄村93.5%、温海町77.2%、中俣村76.8%、黒川俣村71.9%等をあげ、本地域を奥羽出羽山地南部の

焼畑卓越地域と位置づけている。また、山口の研究を援用し、東北の焼畑を「焼畑町村の大部分は水田農業の依存度の高い、いわゆる《米作村》」であると規定し、本地域を含め「カブの栽培を主目的とする『カブガノ』は、飛濃山地や九州……主穀生産型の焼畑とは別種の……《菜園型》の焼畑」⁴⁾つまり補助耕地としての焼畑と規定している。以上のように本地域の赤カブ栽培は多方面から注目されているが、赤カブ残存の要因、集落内での栽培の実態、およびその地域的展開の様相については充分解明されていない。

一方、シナノキの樹皮をはぎ、1年がかりで織り上げるシナ布の生産は、古代織物として織物研究者⁵⁾、民俗学等の分野で注目されてきたが、その焦点は織物工程等におかれている。シナ布生産が残存している新潟県山北町雷中学校の教諭堀豪は、1965年頃楯布生産に注目し、その工程を詳細に記述した⁶⁾。この研究は騰写版刷りであるが、文化庁の民俗資料選集3に収録されている「越後のシナ布紡織習俗」⁷⁾の底本となったものであり、郷土研究として高く評価できよう。このシナ織は雷集落ばかりではなく山北町の山熊田・大代、温海町の関川でも実施されている。しかし、このシナ布についても、赤カブ栽培同様、その残存要因、集落における展開の様相については充分解明されているとはいえない。

したがって、本研究は羽越国境地帯にある山形県温海町、新潟県山北町に残存する焼畑による赤カブ栽培とシナ布生産をとりあげ、その残存要因、集落内における栽培・生産の実態、地域的展開を解明しようとするものである。その際、これらの伝統的生活文化を支えてきた集落内の担い手および集落をと

りまく林野利用の変化に焦点をあてた。

II 地域の概観

日本海に面する温海町、山北町では、それぞれ五十川・温海川・小国川・兎ヶ関川、小俣川・中継川・勝木川が西流し日本海に注ぐ。これらの河川は、江戸時代から製塩用、家庭用燃料としての薪（塩木：ショック）の川流しに利用されてきた。大正中頃まで塩木切り（薪炭生産）は河川の中・上流に位置する集落の重要な産業であった。塩木は、田植から盆まで伐採したものを盆すぎに薪炭の大きさ（3尺）に短かく切ったものである。それを雪の上をそりで川流しする堤まで運び出し、春に海岸部まで鉄鉋流しで搬出した。川流しをしても薪にはすべて斧で木印がつけられているので、他人のものともちがえることはなかったという⁹⁾。このことは河川流域が1つの経済圏で結ばれていたことを示すものであろう。

一方、羽越本線や国道7号線は、海岸部を勝木・府屋・兎ヶ関・小岩川・温海・五十川を南北に通っている。また、旧羽州街道も北黒川・荒川・中継・小俣・小名部・小国・一霞・山五十川という中山間地の集落を通り、峠交通によって南北に結ばれていたのである。同様なことは河川上流部の山間盆地山熊田・雷・関川・越沢・木野俣・温海川・菅野代という南北につらなる集落についてもいえる。このような海岸部、中山間地、山間盆地という南北の地帯構造は、大まかにみると積雪や地質構造などとも対応する。すなわち日本海から上陸した雪雲は海岸部で50 cm以下の積雪を、海岸から離れるにつれ積雪量をまし中山間地で50~100 cm、山間盆地で200~300 cmの積雪量をもたらす。また、地質は海岸部が安山岩・玄武岩の火山砕屑物および堆積岩、中山間部が古第3系と新期花崗岩から、山間盆地が堆積岩から成立しているが、これが農業活動にも影響を与えているのである。つまり、中山間地は温海カブ等の栽培には適するが、広い耕地は最奥の山間盆地に広がるのである。事実、温海町の米の供出高の2/3は山間盆地からのものであった。

以上のように塩木流しという東西性と峠交通、積

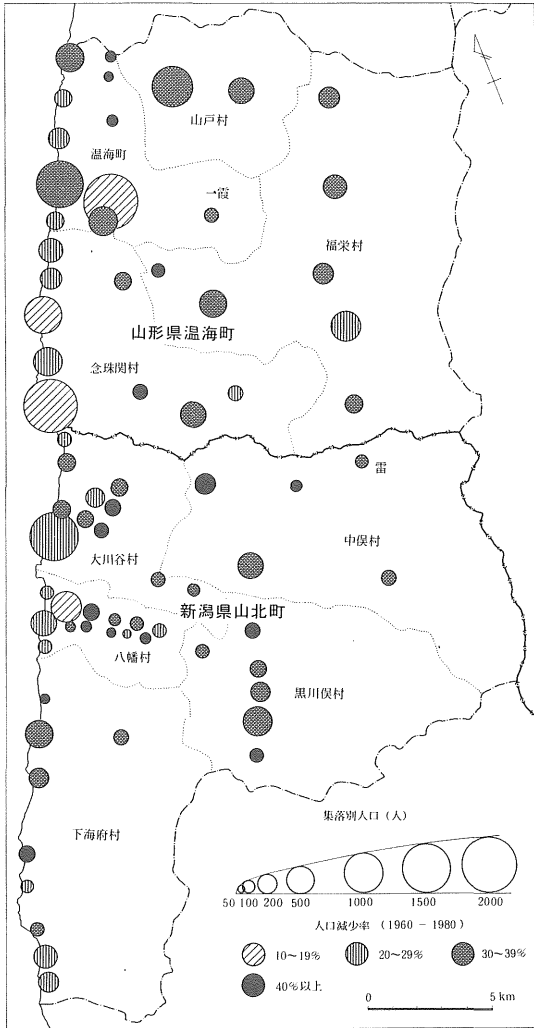
雪、地質構造など自然環境の南北性の要素がからみ合い、中間山地の温海カブ、山間盆地のシナ布の残存という温海町・山北町の地域性が形成されてきたものと思われる。江戸時代に組織された海岸部の温海組・兎ヶ関組・府屋組・勝木組・寒川組、中山間地の小鍋組・中村組、山間盆地の田川組が、町村制の施行によってそれぞれ温海村・念珠ヶ関村・大川谷村・八幡村・下海府村・山戸村・中俣村・黒川俣村・福栄村となったこと⁹⁾にもその一端が表われている。

ここで集落別人口動態ををみることによって本地域の性格をより鮮明にしよう。温海町、山北町では人口が1960年の22,395, 12,435人から1980年の15,055, 10,075人へと変わり、20年間にそれぞれ67.2%, 81.0%となった。しかも第1図に示したように全集落で人口が減少している典型的な過疎町村といえる。しかしその減少率は地域的に異なる。湯温海・小岩川・兎ヶ関・勝木など海岸部の中心集落では人口減少率が20%以下であるのに対し、中山間部の安土・小菅野代・峠の山・鍋倉・小俣・大代・荒川・大沢などの集落では40%以上である。なかでも田川・小菅野代・小俣などは人口が半分以下に減少してしまった。また、山間盆地の集落は30%台の数値を示し、鉄道、国道に恵まれた海岸部の集落（20%台）よりも多い。つまり、大まかにみると人口減少率は中山間地で最も高く、山間盆地がそれにつき、海岸部で最も低いことが明らかになった。これらの数値は、それぞれの地域の農業構造や林野利用の状態を反映すると思われるので、赤カブとシナオリを残存させた山間集落の農閑余業がどのようなものであったのかを分析しよう。

III 農閑余業の変遷

自給自足の農業を営んできた本地域の人々は、江戸時代、商品経済にまきこまれることによって、米ばかりでなく、周囲の林野資源の活用をはかってきた。前述の塩木切り（薪炭生産）は重要であったが、大正末期、輸送手段の改良、道路網の整備に伴って木炭生産が農閑余業として盛んになってきた。

温海町における1935年の木炭生産量は、727,172



第1図 温海町, 山北町における集落別人口と人口減少率(1960-1980)

貫(2,727トン)で、福栄村、念珠ヶ関村、山戸村、温海町の順であった。1953年には1983トンの木炭が生産されていた(第1表)。山形県全体の木炭生産量が1934・35年の7万トンでピークをむかえ、1950~1960年も5万トン以上を生産していた¹⁰⁾のであるから、1960年は製炭戸数は1957年に比べて減少しているものの、木炭生産最盛期の様相を示すものといえよう。つまり、最盛炭月が冬期と夏期に

あるものの、多くの農林家が300~1000俵の木炭を生産していたのである。木炭生産は全域で行なわれていたが、下海府村を除き、その資源の賦存状況から海岸部より山間部で盛んであったことが伺われる。

木炭生産は、その後エネルギー革命によって急落した。温海町の木炭生産は、1965年の963トン、1970年の128トン、1975年の11トンと推移し、現在生産されなくなったことにそのことが示されている。山北町においても1965年の1295トン、1975年の305トンへと急落したが、1981年においても204トンの木炭が生産され、余命を保っているという状況である。

木炭の減少にかわり、ナラなどの木炭原木を活用し、ナメコ、シイタケの生産が活発に行なわれるようになった。とくに温海町ではナメコの原木栽培が1952・53年の高価格を反映して盛んになり、1962年の62.3トンを経て、1969年の118.6トンとピークを示し、山形県下有数の原木ナメコの産地となった¹¹⁾。山北町においてもナメコ生産は、周囲のブナ、ミズナラ、などのブナ帯の樹木を活用し、1965年頃から盛んになり、1970年には80トンを生産するまでになった。ところが、ナメコのオガクズ栽培の普及につれて、ブナ帯の風土に適した原木ナメコの生産は減少し、1980年には両町とも50トン弱であった。このことは原木ナメコの生産活動が木炭生産ほど大きな現金収入、就労機会をもたらさなかったことを意味するものであろう。

木炭生産の衰退は稲作の機械化と相まって農村における男子労働力の通年労働を困難にさせた。水稲作と木炭生産という農閑余業の有機的結合によって成立していた山間地農村の男子労働力の完全燃焼の一形態が人夫・日雇であり、出稼ぎであった。周知のように職業を異にする垂直的出稼は、1963年の東京オリンピックを契機に起こったものである¹²⁾。温海町における出稼人口は1963年の2,009人をピークに漸減したが、1965年の1,528人、1970年の1,939人、1975年の1,485人と人口の10%前後を占めていた。一方、山北町における出稼人口は1965年の854人、1973年の939人以後漸減傾向を示している。

第1表 1960年の木炭生産状況

町 村	製炭者数		規模別製炭者数(戸)					木炭販売量		最盛炭月	
	1957	1960	100俵以下	100-300	300-500	500-1000	1000以上	総数	1戸当り		
温 海 町	温海町	33戸	28戸	—	2	11	14	—	15千俵	536俵	12
	念珠関村	61	57	—	12	22	20	3	33	579	8
	山戸村	59	48	3	12	17	16	—	22	458	1
	福栄村	179	156	13	25	51	67	—	70	449	1
山 北 町	中俣村	197	168	28	62	33	41	4	59	351	11
	黒川俣村	105	100	10	22	23	28	17	53	530	8
	大川谷村	18	12	5	3	1	3	—	3	250	5
	八幡村	15	17	1	3	6	7	—5 7	467	12	
	下海府村	179	152	17	40	24	38	33	99	651	8

1960年世界農林業センサス市町村別統計書(林業地域調査)による。

1980年の出稼人口は温海町、山北町それぞれ949人、596人であった。集落別にみると、出稼者数が多いのは温海・雀ヶ関・越沢など人口の多い中心集落であり、出稼人口率が高いのは、峠の山の19.3%を最高に関川・越沢・温海川・菅野代など山間盆地の10%以上の冬期出稼型集落である。また、山五十川・一霞・小国など中山間部の集落が2～3%であるのに対し、海岸部の出稼率が5～10%に達するのは、通年型出稼が多いためである¹³⁾。このような地帯別出稼傾向は山北町にもほぼ妥当するものである。

また、60才以上の老人人口率をみると、中山間地の集落で25%以上を示し、4人に1人が老人であることがわかる。これに対し、山間盆地では20～25%、海岸部は20%未満である。基幹労働力が冬季あるいは通年出稼に出た後、農山村に残されるのは老人と主婦である。本地域において焼畑による赤カブ栽培やシナ織りが残存したのは、その仕事の大部分が、この農山村に残された老人や婦人によって担われてきたためであると考えられる。以下、焼畑による赤カブ生産の核心地、温海町一霞とシナ織の核心地山北町雷集落を事例に伝統的生業の実態と存続条件を解明しよう。

IV 温海カブ栽培の実態

IV-1 一霞集落における焼畑カブ栽培の現状

一霞集落は温海温泉の東4kmに位置する中山間地にある。しかし、一霞は江戸時代から温海組に属していたので、海岸部との交流も強い。一霞の生業は

温海川の氾濫原に広がる31.7haの水田農業を基盤としながらも、温海町の産業変化に対応し、塩木切り、製炭と移ってきたといえる。木炭の最盛期には一霞だけで年間2万5千俵(15kg入)を産出したという¹⁴⁾。第2図に示したように、26戸からなる一霞集落は水田が卓越し、畑が極端に少なかったことが、塩木切り、製炭など周囲の森林資源を活用した山仕事と相まって、本地域に水稲作補助的な焼畑農業を残存させてきた一因であろう。

一霞の焼畑は7月中旬に雑木を伐採し、8月初めの小乾季に火入れをし、1年目にカブラか蕎麦を播き、2年目大豆、3年目小豆、4年目休閑して5年目にカブラを播種するのが普通だったという¹⁵⁾。つまり、温海カブは、雑木の伐採地を活用し、水田を補う畑地の意味をもった「菜園型」焼畑農業の一環として行なわれてきたために、現在まで残存してきたのであろう。最も現在、2年目にアズキを栽培しているのも若干みられたが、温海カブは1年目にカブラ、2年目休閑、3年目カブラ、以後荒しという形態が最も多い。

現在、一霞集落では、耕地、山林所有の大小にかかわらず、23戸の農家および3戸の非農家すべて赤カブを栽培している。焼畑による赤カブ栽培面積は、4町歩に達し、最大のものは24番非農家である。山林を所有していない者でも焼畑による赤カブ栽培ができるのは、430町歩に及ぶ部落共有林があるからである。つまり、共有林を管理する一霞森林組合員であれば、温海カブ栽培は指定されているものの、

だれでもそこで赤カブを栽培することができるからである。一霞森林組合員には、一霞部落の出身で一霞に居住していれば、5000円の入会金を払うことによって、だれでもなれる。一方、1982年から稲作転作の一環として水田に赤カブが2ha栽培されるようになったため、一霞での温海カブの栽培面積は6haになった。水田においても雑草の刈取り、火入れが行なわれるが、温海カブを水田に栽培するには抵抗があった。しかし、庄内では稲転による温海カブ栽培が実施されていたこともあり、政府に協力することになった。したがって、現在転作試験田を含め、水田1ha以上を有する13戸の農家によって2haの赤カブが栽培されている。かくて一霞集落では全階層的に温海カブが栽培されているのである。

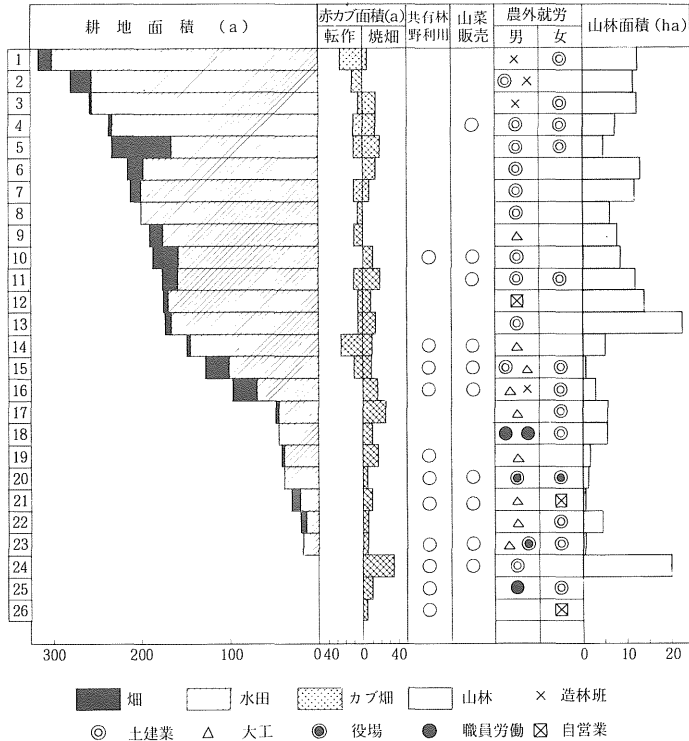
ところで、焼畑を行うには役場に火入れ許可申請を出さなければならぬ。1981年の「火入れ許可台帳」によると、一霞で焼畑目的の23件の申請がだされ、認可されている。面積は1aから1haまで巾があるが、火入れ期間は7月20日から8月10日までですべて入る。温海カブの播種は盆までに、特に8月10日までにするのが良いという俚諺がここに生きている。焼畑の適地は温海岳の中腹がよいとされるが、それは、そこに「朝日が当たっても夕日はほしくない」、「湿度はあっても水はいらない」というような北東向斜面が存在するからである。

温海カブの播種は「午前中焼いたらその日の午後に、午後焼いたら翌日の午前中」という具合に、まだまだぬくもりが残っているくらいがよい¹⁶⁾という。播種された赤カブは急速に成長し、傾斜畑の様子によって10月から間引する形で収穫され始め、漬物加工して地元の五十嵐菊子商店や農協に出荷される。生で出荷すると110円/kgであるのに、独得の風味のある温海カブの甘酸漬は400円/kgで出荷できるからである。しかし、11月10日以降の収穫最盛期には赤カブは生で出荷される。温海カブは、雪に合うと薄味になるといわれ、「小雪10日でカブラを摘みなさい」の如く、収穫期間が短いからである。

一霞では、温海カブの採種を行っているところに焼畑による赤カブ栽培の核心地の特色がある。自家用種子の採種は本来、焼畑から色と形のよい株を

80~100個とってきて家の周囲の畑に定植し、翌春開花・結実させて採種するものであった。しかし、近年温海カブの栽培が庄内地方一円に普及してきたため、種子に対する需要が多くなってきた。そのため種子は温海カブ栽培の焼畑から直接採種するようになった。一般に、焼畑カブは収穫した後でも若干の株は収穫しきれずに残ってしまうが、その小さな株が雪の下で成長し、春には菜の花を咲かせ立派に実を稔らせる。この種子を採種し、他地域の需要に答えるのである。普通の農家で平均2斗、全体で3石の種子が採種される。この種子は1升8,000円で農協、種屋、漬物会社、個別農家に販売されるので、農家にとって比較的良い収入となる。一霞以外でとった温海カブの種子は栽培すると先祖がえりなどの現象が生じ、温海カブ本来の形と色・味がでないといわれているためである。一霞では、温海カブの純粋種の保持のため、温海カブと交配しうる十字科植物の花を咲かせてはならないという不律律があり、事実、十字科植物の花が咲くようなら切って歩くという慣行が続いてきたのである¹⁷⁾。

ところで戦後の木炭生産が盛んな頃、1戸当たり平均3人の農林業労働力を有していた一霞の農家は、エネルギー革命の進行に伴い労働力を如何に振向けるかが課題であった。部落会で協議した結果、造林、赤カブ栽培、工業誘致が農閑余業の三本柱で木炭生産の減少に対処することになった¹⁴⁾。炭焼きを行いつつも私有林への杉の造林が行なわれてきたが、それが本格化したのは1960年以後のことである。1973年から山形県造林会社の分収林として共有地への造林がすすめられてきた。共有地への造林は、農業経営の規模の大きな農家の世帯主4人が構成する造林班によってなされるが、それは赤カブ栽培の適地を除いた不便な共有地の高度利用をはかるためである。さらに農閑余業の職種をみると(第2図)、本地域では出稼がないのが特色である。男子では12人が土建業に従事しているが10人は地元の佐藤組に通勤している。以前、出稼を行っていた大工8人も現在では通勤できる場所に職場をえている。また、一霞小学校の廃校跡に誘致した縫製工場では11人の主婦が働いているのも部落会の方針として高く評価



第2図 温海町一霞集落における農家別赤カブ栽培状況
(土地台帳および聞き取り(1982年10月)による)

されよう。

以上のように一霞では、赤カブ栽培が稲作や農閑余業と無理なく結合しているので、焼畑による赤カブ栽培は、温海カブの核心地として存続し続けると考えられる。

IV-2 温海町および庄内における温海カブ栽培の展開

1950年世界農業センサスによると、旧温海町、念珠ヶ関村、福栄村、山戸村にはそれぞれ16.41、17.76、23.54、14.55 haの焼畑および切替畑が存在した。カブ栽培面積は温海町が1.62 ha、山戸村が2.84 ha、隣村する湯田川村(現鶴岡市)に1.33 haが記載されている。焼畑面積とカブ栽培面積の間に整合性はないが、後者のカブは、「湯田川村藤沢の焼畑で作られている赤カブで、温海カブとほとんど変わりはない。しかし、温海カブに比べると雑ばくで、なかにはかなり長いカブを作る農家もある」¹⁸⁾という

藤沢カブである。また、一霞に北接する山戸村で1950年にカブ畑が2.85 haあるのは、温海カブが中山間地で最もよくできるという俚諺に対応するものであろう。

ところで、温海温泉は藤沢カブのある湯田川温泉より有名で、各地から湯治客が集まった。とくに海の幸と山の幸が集まる温海温泉の朝市は有名である。温海カブは中秋から初冬にかけてこの朝市を飾る風物詩であった。したがって、熱海温泉の朝市が、この温泉の最も近い一霞に焼畑による赤カブを栽培させた一因とも考えられるのである。しかし、山口が、「温海蕪菁は温泉部落の名産物となっている」ことを認めながら、念珠ヶ関村では「主に長い赤カブで、丸いものや白いカブを植える人もある」¹⁹⁾と記録していることは、丸かぶ系の赤カブである温海カブが、戦中、戦後極めて限定された地区で栽培されていたことを示すものであろう。

食糧事情の好転と製炭の衰退は温海町における焼畑面積を減少させたと思われる。つまり、ソバ（カブ）ーダイズーアヅキー休閑ーカブという作付方式のうち、赤カブのみが相対的に価格がよいので焼畑として残存してきたものであろう。高度経済成長期において細々で行なわれてきた焼畑による赤カブ栽培は、安定成長期に入ると無農薬、自然農法の最たるものとして脚光をあげてきたのである。ピンクがかかった淡紅色の色彩とピリッとした辛味で知られる温海カブの漬物は、今日、漬物専門店ばかりでなく、デパートやスーパーの食品売場までならぶようになった。温海町一霞でも「温海カブの栽培が盛んになったのはここ12・3年前（1967～68）のことである」²⁰⁾というはその証左であらう。

ここで、火入れ許可台帳を手がかりに温海町における赤カブ栽培の状況をみよう。ほぼ旧温海町を範囲とする本庁関係の台帳には1980年61件、1981年70件、1982年61件の火入れ許可願が提出され、焼畑名目となっているのは、それぞれ44、61、54件であった。1981年の台帳から部落別にみると一霞23件、五十川17件、楨代15件、湯温海3件、温海1件であった。地域外では小国5件、兎ヶ関・早田・大岩川1件であった。旧町村の支所兎ヶ関・木野侯・山五十川の資料が集まれば、赤カブ栽培面積の近以値をえられるだろう。近以値というのは、焼畑で温海カブを栽培するすべての農家が火入れ許可申請書を提出するわけではないからである。ちなみに温海町の焼畑による赤カブ栽培面積はおよそ20haと推定されている。また、一霞・五十川・楨代の火入れ面積をみるとそれぞれ275.7a、41.76a、104.5aで、ききとりと景観観察に類似していた。なお、焼畑を行う地目は山林が最も多いが畑16件、水田8件、原野・草山6件に加え、雑種地、荒地も含まれている。

水田が8件あるのは、温海カブが前述のとおり、水田転作の地域振興作物（反当り転作奨励金5万円プラス5千円の加算金が支払われる）になっているためである。水田転作による温海町の赤カブ栽培面積は、13.53haにのぼる²¹⁾。地域別にみると、温海川(2.02ha)・一霞(1.69)・平沢(1.62)・小名部(1.32)・関川(1.19)・小国(1.17)が多い。温海町の

29部落中、水田に赤カブを栽培していないのは、熱海・釜谷坂・早田など海岸部の集落であるので、ほぼ全域に温海カブが栽培されているといえる。

温海カブの種子は前述のように一霞で3石採集され農協、種屋、食品会社を通じて庄内各地に販売される。10aの播種量が（1合五勺であれば、熱海カブの栽培面積は200haに達することになるが、県の推計では75ha位ではないかという²²⁾。たとえば、温海町よりも早く温海カブを水田転作の地域振興作物とした羽黒町では水田に11ha、畑地に13haの赤カブが栽培されているという²²⁾。水田に栽培された赤カブは焼畑栽培のものよりきめが荒く、表皮に斑点が出る傾向もあるが、羽黒農協の場合、温海カブは農協を通じて契約栽培されるので、生産物は全て漬物会社に販売される。庄内地区で最大の温海カブ漬物会社のマルハチ食品（余目町）では、羽黒町をはじめ、榎引、遊佐、松山、立川、温海、鶴岡などの庄内地域の町村ばかりでなく、戸沢、舟形などの最上地域の町村とも赤カブの取引をしているのである²⁴⁾。このように赤カブ栽培の庄内の水田および畑地への拡大は、漬物会社のイニシアチブの下で進行したものである。しかし、10haの赤カブ栽培面積を有する鶴岡市において、8haに及ぶ焼畑による赤カブ栽培が湯田川地区にある²⁵⁾のは、そこが、温海町とくに、一霞から続く地に属するからであると思われる。

IV-4 新潟県における赤カブ栽培

温海町に南接する新潟県岩船郡山北町においても焼畑による温海カブの栽培が認められる。ただ、1982年10月の自動車道路からの観察では温海町が85地点であったのに対し、8例しか確認できなかった。これは山北町の火入れ許可申請書をみても同様である。すなわち、1976年から81年までそれぞれ61、53、74、57、59、67の火入れ申請書が出されているが、焼畑ないしカブ栽培と記してあるのは、それぞれ1、2、5、6、4、4件にすぎなかった。しかし、1982年度の火入れ申請綴りをみると1～6月5件、7月11件、8月47件、9月1件で7・8月に集中しひいる。しかも、7月25日～31日までが10件、8月1～10日が38件と赤カブ播種適期に火入

れ日が集中していることがわかる。その上、その期間の火入れ面積は10~20aが最も多く、焼畑による赤カブの栽培の存在を予想させる。

山北町における温海カブの栽培は、旧羽州街道沿いの小俣・中継・大毎・荒川口に多いという²⁶⁾。これらの集落は、温海町の赤カブ栽培中心地である一霞・小国・小名部から続く新期花崗岩地帯でもある。山北町で収穫された温海カブは、森林組合を通じて酒田市の漬物業者に出荷されるが、その量は1980年11月25日現在で15.8トンで、多いとはいえない。1982年筆者の確認したところによれば、大代や雷の集落ではほとんどの農家が温海カブを栽培していたのである。

山北町雷集落では、後述するように大多数の家で温海カブの栽培をしているが、それは、その栽培が北接する温海町関川の漬物工場(大成食品株式会社)との契約栽培によって近年普及したものである。ところで山北町における温海カブの栽培は、温海町一霞と異なり、植林のための地拵的要素が強い。つまり、一霞の赤カブ栽培は休閑期は短い²⁷⁾が、純然たる焼畑として行なわれるのに対し、山北町における温海カブ栽培は、杉の人工林との切替畑として実施されているところに特色がある。

1982年温海カブの栽培が山北村の南の新潟県岩船郡朝日町で始まった。朝日町高根地区では農用地開発事業の一環として30haの耕地が造成される予定であるが、現在10haの造成地に粟・桑・アスパラ等が栽培されている。温海カブは、粟の間作として1ha、地元の漬物工場朝日産業との契約で栽培されたものである²⁷⁾。

V シナ布生産の実態

V-1 シナ布の分布

落葉樹林帯の喬木であるシナノキの樹皮を活用した織物であるシナ布は葛布、藤布、楮布などとともに麻以前の古代織物として知られている。アイヌ民族のアッシ織りもシナノキに類似したオヒョウの樹皮で織られたものであるが、シナオリと異なり、糸に撚りがかかっていないのが特色である。富樫らによれば、シナフ(楯布)は「新潟県岩船郡山北村の大代・

向・山熊田・雷、山形県西田川郡温海町の関川・越沢・福島県飯坂町茂庭と梨平の三地区が、産地として残っている²⁸⁾としている。しかし、このほか新潟県佐渡の外海府戸牛部落²⁹⁾や、国中平野の長江³⁰⁾にも級布の生産が残存していたのである。また、瀬川清子は東北地方のマダばかりでなく、シナノキにいた九州のへらをも「しなぬの」としてあげている³¹⁾。事実、東北地方の歴史民俗博物館をたずねると、シナ布がマダ布として陳列され、かつて肌着としても広く使用されていたことがわかる。以上のようにシナ布は、麻や綿花が導入される以前、常民の衣料として広範に存在していたものと思われる。「科布は飛騨では東北地方などより割合に早く衣料からはずされていたらしい³²⁾」というのは、優れた衣料である大麻や綿花の北上につれて、それが落葉樹林帯(ブナ帯)に残存したことを意味するものであろうか。

新潟県においても秋山郷ではシナ布ではなくエラソ(野苧)で作ったアングンが古くから使われていた。³³⁾また、山形県小国町樽口では蓑ばかりでなく楯繩が現在でも製造されている。馬のくつわに使われた楯繩は大正時代、奥会津の桧枝岐村では重要な収入源であった。ともあれ、遠い昔、全国的に分布していたシナ布は麻の普及、とくに江戸時代における落葉樹林帯への綿花の普及によって東北地方の山村に残存することになったと思われる。東北地方であっても常民の衣料がマダ布から苧麻(カラムシ)に変わった比較的暖かい地方では、シナノキが楯繩等を生産するのに用いられるようになったと思惟される。

ところでシナノキは北海道から東北地方に多く生える落葉喬木であり、オオバシナ(オオバボダイジュ)とコバナシナノキ(しなのぎ)がある。両者とも新芽はあえもの、浸物として食用にされ、樹幹は材質が軽軟で工作が容易であるため、「時計枠、調革車、洋風建築及び指物彫刻、燃寸軸木、セメント樽³⁴⁾」に使われたという。しかし、この軽くて軟かい材質は木炭の生産には適さず、キワダ、ミズキなどとともに山林に残されたともみることができる。つまり、シナノキは東北地方の風土に合った樹木といえるだろう。一方、シナの語源は「皮がシナシナす

ることから、またはその皮が白いのでシロから来たなどというが、元来シナは『結ぶ；しばる；くくる』という意味のアイヌ語からきたものである』³⁵⁾こと、およびシナ布は、古代染の研究家上村六郎氏が『アイヌ織物とその原料がいっしょであり、しかも日本の北の方の国々が盛んであったことから、アイヌ系の文化である』³⁶⁾と結論されているようにブナ帯の文化であるといえよう。ここで、シナ布生産が残存している羽越国境地域の核心集落、山北町雷集落に焦点をあて、シナオリ生産の実態にふれてみよう。

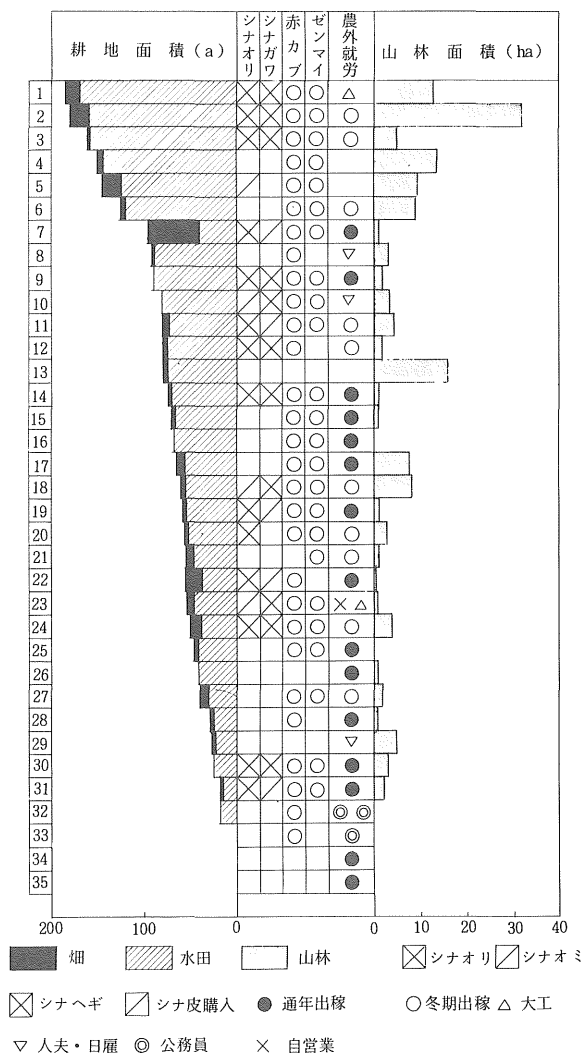
V-2 山北町雷集落におけるシナ布生産の実態

雷集落は、山北町役場のある府屋から東へ13km、小俣川の最上流部にある集落である。現在、雷集落の母村と考えられる川南の向集落9戸と合せ35戸が雷集落を構成している。山林31.5haを所有する木村家は、江戸時代に250町歩を所有していた実力者で、現在でも「親方さま」と呼ばれている。雷集落では全国の隔絶山村にみられるように、封建的隷属関係が残存してきたものと思われる。現在では瓦葺きの民家が多いが、1960年頃までは杉皮で葺いた石置屋根が集落景観の特徴をなしていた。

雷集落の生業は、一霞集落同様、水田農業を基盤に山林資源を活用した副業を加えたものであった。しかし、耕地面積が一霞より少なく積雪が多いため、森林資源に依存する割合はかえって高かった。つまり、江戸時代からの塩木切り、杉の伐採、製炭などの山仕事が必要な渡世であった。風雪が強く山仕事に出られない日には、男は藁仕事(バンドリ・荷縄)、女はシナオリに従事した。「中俣、黒川俣地区等の山間部に特に多い『科機』がある。現在でも山熊田や雷では老人や女子の夜仕事として、炬燵で若干行われている』³⁸⁾というのは、その事情を示すものである。シナ布は、農業や山仕事をする際の野良着などの衣料ばかりでなく藁蒲団の皮、穀袋、畳の縁、酒搾り用袋、魚網などとして巾広く使われたのである。

日本の高度成長期における木炭生産の衰退に伴って本地域では山仕事がなくなり、その労働力を出稼ぎに振りむけるようになった。東京オリンピック工事からの、いわゆる出稼ブームの際には夫婦出稼まで出現させるに至った。しかし、前述のように

一霞より積雪の多い山村では工場誘致は困難であり、現在まで通年出稼を行う家が15軒、冬季出稼を行う家が10軒もあり、出稼の村といえよう(第3図参照)。このような木炭生産の衰退と出稼の進展はシナ布に対する需要をなくし、シナオリを衰微させるに至った。したがって、出稼に行くことのできない老人や主婦の手でシナオリが細々と続けられてきたのである。現在でも、山林と耕地面積の比較的大き



第3図 山北町雷集落における農家別シナ布生産状況
(土地台帳および聞き取りによる)

な農家にシナオリが残存しているのは、その間の事情を示すものであろう。

一方、高度成長期は、失なわれてゆく日本の国有文化、伝統工芸に人々の目を向けさせる転機でもあった。1960年『民芸手帖』に雷のマダ布の美しさ、魅力が紹介されて以来、雷ではシナ布が唯一の伊藤梅子商店を通じ新潟県村上市の東北工芸に納入され、商品化された²⁸⁾。また、雷に北接する山形県温海町関川では、古代織物に関心をもっていた米沢市の織物問屋山村商店が1970年以来、シナオリを一手取引し、白鳥ゼンマイ織り等も奨励した³⁹⁾。絶滅に瀕していたシナオリは、1年間にわたる手仕事で完成されるだけであって、素朴で味わいのあるものである。したがって、シナ布は比較的高価に販売でき、シナオリを復活させる要因となった。

ここで雷に関連させてシナオリの工程についてふれてみよう。シナオリは樹盛が最も活発な6月に伐採される。それはキハダなどと同様、樹皮がはがしやすいためである。このシナヘギは、太さ15cm位のシナノキが最も適するが、それは切株から傍芽更新するため8~10年で再び伐採できるものである。1機のシナオリには20貫のシナガワが必要であるが、それはシナヘギの直後、韌皮と表皮を分けたものである。シナガワは家に運ばれ、軒下などで乾燥(アマホシ)され、貯蔵される。このアマホシによって重量は半分になる。雷にはシナオリを行う農家は14軒、シナ糸を紡ぐシナオミまでする農家が4軒あるが、この18件のうちシナヘギを行っている家は11軒、残りの7軒は、他から供給を受ける。シナ皮は、以前温海町越沢の人から購入したが、現在では関川からシナ皮の供給を受け、製品を納入する賃織の形態をとっているという⁴⁰⁾。なお、越沢では、火事で織機を焼いてしまったのが、シナ皮の調達地域になった大きな原因であるという⁴¹⁾。

シナヘギ・シナホシは、夏の男の仕事であるが、シナニからシナツケまでは盆から9月までの仕事である。シナ皮は川水に浸された(ウルガス)後、シナ釜で10時間位、木灰とともに煮られる。1回で1斗2~3升、一機で2回分、2斗5升必要な木灰は、かつて囲炉裏で燃やしたナラらブナなど落葉広葉樹

のものであったが、近年囲炉裏の消失とともにスギ、クリなどの木灰、重曹なども使われるようになった。シナ煮した後、シナ皮は熱いうちに叩いたり、もんだりした後、薄くはいでゆく(シナモミ)。「シナ皮は千枚にはげる」といわれるように、1枚のシナ皮を10~30枚にはがし、タテとヨコに分類する(アマタテ)。アマタテされたシナ皮は、木灰がついているので、川水で黒皮の部分とともに洗い流される(シナコキ)。シナコキされたシナ皮は紅褐色であるので、樽に米糠とともに2日間漬け、発酵させることによって黄褐色にする(シナツケ)。それを水洗いして貯蔵する。

シナツケされ貯蔵されたシナ皮は、稲の収穫が終った晩秋から初冬にかけて、細く細く裂き(シナサキ)、糸につないで行く(シナオミ)。このシナオミは何人が集まって茶のみ話をしながら行うという。シナオミされた糸は巻いて玉にされ(ヘソカキ)、シナヨイ車でシナ糸に縀をかける(シナヨリ)。それを枠に移した後、経糸を長さ20丈、上下各140本ならべ(ハタへ)、それを箆に通し(オサザ)、イザリ機で1冬かかって織りあげるのである⁴²⁾。シナオリを行う家では少くとも1機(20丈×1尺2寸;60m×36cm)は織る。手間のある家では平均1機半位織るといふ⁴⁰⁾。シナオリはシナオミした原糸の量によって決まるので、この場合、20丈と10丈のシナ布が機上される30貫のシナヘギを行うことを意味する。

6月のシナヘギに始まり4月までの1年近くを費やして織られたこの布は、1982年一機13万円であったという。販路は関川を通じ米沢の山村商店、地元のシナ布仲買商伊藤梅子商店を通じて小千屋の織物問屋におろされるもの、および雷の民芸研究会の仲間テーブルクロス、財布、人形、ブローチなどの民芸品を製造する形態がある。なお、伊藤梅子商店ではシナ糸の段階で糸を買い占め、小千谷の織元で染色した後、雷で賃織りに出すいわゆる産地問屋(織元)の役割もしている。しかし、自らもシナオリをしており、雷では、冬期山村に残された働ける婦人はすべてシナ布生産に関係しているといっても過言ではないであろう。

シナオリの他、雷においては、温海カブが35戸中29軒で栽培され28戸で販売されていることに特色がある。赤カブの種子は温海町の一霞の農家および関川の大成食品(株)を通して供給される。雷では、赤カブが杉の伐採跡地に、杉の植林の地拵えとして栽培されることに特徴がある。したがって、山林をを所有していなくても、林家の土地を無償で借りることによって赤カブ栽培が可能である。この切替畑式の焼畑は、九州や白山麓のように擬制的同族集団の遺制関係が残存したところに共通にみられる現象と考えられる⁴³⁾。

さらに、雷ではゼンマイなどの山菜に依存する割合が一霞より高い。山菜採集は東南に接する朝日村三面⁴⁴⁾、狩猟は三面とともにマタギ集落といわれる山熊田につぐものであろう。

VI むすび

焼畑農法による赤カブ(温海カブ)と古代織物であるシナ布の生産が残存している羽越国境地帯で、それぞれの核心集落山形県東田川郡温海町一霞と新潟県岩船郡山北町雷を事例にその生産の実態と残存要因を調査した結果、次のことが明らかになった。

①両集落とも農業を主体にしながらも、山城の森林資源を活用した塩木切り、製炭に大きく依存してきた。耕域の大部分は水田によって占められていたので、焼畑が菜園のおよび食料補完的役割をはたしてきた。水稻生産の上昇とともに焼畑からヒエヤソバが消失し、温海カブ、小豆が残存した。

②シナ布の生産もかつて全域で行なわれたが、中心集落のある海岸部から、ついで中山間地で消え、最上流部の山間盆地集落で残存するのみとなった。その地区は積雪量も多く、塩木切り、木炭生産ばか

りでなく山菜採取や狩猟に依存する割合が高く、山仕事の野良着としてシナ布に依存する割合も高かったのである。

③温海町一霞で焼畑カブの純粋種を保持できたのは、温海温泉の旅館や朝市で赤カブに対する需要が存在したこと、および430町歩の共有地の存在によって誰れでも焼畑を行うことができたからである。また、温海カブ以外の十字科植物を咲かせてはならないという慣行が存在してきたためである。

④エネルギー革命による木炭生産の衰退は、資源的にはナメコやシタケの原木栽培を促進させたが、それは炭焼きに変わりうるものでなく、大量の出稼を発生させるに至った。一霞では縫製工場の誘致、土木会社の活動によって出稼はなくなったが、雷では季節出稼ばかりでなく通年出稼も多い。赤カブ栽培とシナオリが残存しえたのは、それが山村に残された主婦と老人の仕事だったからである。

⑤出稼を発生させた日本の高度成長期は、日本の個有文化、伝統工芸に国民の目を向けさせる時期でもあった。焼畑という自然農法による温海カブは、無肥料・無農薬食品として、1年がかりで織りあげられるシナ布は、古代織物として脚光をあげ、復活してきた。雷では素朴で美しいシナ布が風雪の中で比較的耕地面積の多い18軒の農家の主婦によって織りあげられているのである。

⑥温海町には一霞の4haをはじめ約20haの温海カブ栽培の焼畑がある。隣接する鶴岡市田川地区の8ha、新潟県山北町の切替畑を含めると、30ha強となり、現在わが国最大の焼畑地域である。また自然食ブームで、一霞の焼畑で採種された温海カブの種子は、庄内一円に流布し、温海カブは温海町を含め、75ha近く栽培されるようになった。

本調査は直接的には市川健夫を代表とするブナ帯研究会の巡検が契機となり文部省科学研究費「林野利用からみた地域農業構成体の変化」(一般研究B, No.57450058, 代表斎藤功)の一部を活用し実施したものである。温海町山北町役場の方々および一霞の佐々木健一、雷の間清子氏にお世話になった。また、製図は本学の宮坂和人氏にお願した。記して感謝するものである。

[注および参考文献]

- 1) 青葉 高(1976):『北国の野菜風土誌』東北出版企画, pp. 171—172.

- 2) 青葉 高 (1981): 『野菜』法政大学出版局, 332 p.
- 3) 山口弥一郎 (1944): 『東北の焼畑慣行』および (1972): 『山口弥一郎選集』第3巻, 世界文庫, p. 304.
- 4) 佐々木高明 (1972): 『日本の焼畑』古今書院, p. 129.
- 5) 富山弘基・大野 力 (1967): 『日本の伝統織物』徳間書店, pp. 141—143.
- 6) 堀 豪 (1966): 『シナ布について—岩船郡山北町雷における—』, 17 p.
- 7) 文化庁文化財保護部編 (1975): 越後のシナ布紡織習俗—新潟県岩船郡大字雷一. 民俗資料選集, 3, 1—49.
- 8) 本間陽一 (1965): 『山北村郷土史—山と川と谷の民衆史—』, pp. 186—191.
- 9) 温海町役場 (1980): 『町勢要覧あつみ, 1978』および山北町役場 (1980): 『1978 町勢要覧』による。
- 10) 斎藤 功 (1978): 森林利用の変化—広葉樹を中心に—. 『里山地域開発保全計画調査報告書 (山形地域)』, 林野庁, 83—98.
- 11) 斎藤 功 (1983): 東北地方におけるナメコ栽培の発展と生産地域の変動. 北条 寿教授退官記念論文集, pp. 18—27.
- 12) 斎藤 功 (1972): 秋田県における出稼相の変化. 秋田地理, 7, 1—8.
- 13) 温海町 (1981): 『昭和 55 年度出稼実態調査報告書』, 25 p.
- 14) 温海町—霞佐々木健一氏からのききとり (1982年 10, 12月) による.
- 15) 温海町—霞佐々木平吉 (明治 44 年生れ) 氏からのききとりによる.
- 16) 佐々木文子 (浜田泰輔執筆) (1974): 山腹斜面を利用した伝統的焼畑農法によるカブ栽培. p. 16.
- 17) 温海町役場前助役—霞の佐々木定吉氏からのききとり (1982年 10月) による.
- 18) 前掲 1), p. 182. ところで, 湯田川温泉の池田ちえ子氏によると, 藤沢カブは肘折カブのようにヒノナ系統の長カブであり, 温海カブのようにアバ漬け (お湯で洗って味噌でつける) にされたが, 喜ばれないためしだいに温海カブに代わったという。
- 19) 前掲 3), p. 304.
- 20) 温海町—霞佐々木文子, 忠鉢すみ子氏からのききとり (1980年 7月) による.
- 21) 温海町役場転作物集計表による.
- 22) 山形県農林水産部園芸特産課藤田清久および農政課庭山満氏による.
- 23) 山形県東田川郡羽黒町農業協同組合の鈴木充氏の談話 (1982年 12月) による.
- 24) 株式会社マリハチ代表取締役阿部武敏氏からのききとり (1982年 12月) による.
- 25) 鶴岡市農業協同組合鈴木嘉一郎氏の談話 (1982年 12月) による.
- 26) 山北村後場産業課 板垣絢一氏 (1980, 1982年) による.
- 27) 朝日村役場産業課斎藤厚生氏の談話 (1982年 10月) による.
- 28) 前掲 5), p. 141.
- 29) 佐藤利夫・加藤園江 (1971): 海府級織り考. 佐渡史学, 7, 40—48.
- 30) 古河静江 (1964): 民具. 『佐渡—自然・文化・社会—』, 225—239.
- 31) 瀬川清子 (1948): 『きもの』六人社, pp. 1—10.
- 32) 江間三枝子 (1958): 衣料. 『日本民俗学大系 6』平凡社, p. 299.
- 33) 市川健夫 (1961): 『平家の谷—秘境秋山郷—』令文社, p. 68
- 34) 農務省山林局 (1912): 『木材ノ工芸的利用』大日本山林会, p. 1235.

- 35) 牧野富太郎 (1961) : 『牧野新日本植物図書鑑』北隆館, p. 383.
- 36) 前掲 5)
- 37) 前掲 8), pp. 374—377.
- 38) 前掲 8), p. 239.
- 39) 朝日奈勝 : 古代織物の隠れ里・羽前関川, 116—124. (年代, 掲載誌不明).
- 40) 山北町雷, 間清子氏からのききとり (1982年10月) による。
- 41) 尾崎行也・佐々木清司 (1982) : 科布をたずねて, 紬 (上田紬研究会), 陸, p. 34.
- 42) 前掲 6) および 7) 参照.
- 43) 市川健夫・斎藤功 (1979) : 日本におけるブナ帯農耕化試論, 地理, 23—12, 84—102.
- 44) 三井田吉右 (1974) : 東北日本奥地山村におけるゼンマイ生産の実態とその集落維持的意義, 地理学評論, 47, 370—386.